

## 取組報告

**濱田 理恵 (HAMADA Rie)** / 京都教育大学附属幼稚園 教諭

幼稚園教育は「環境を通して行う教育」が基本です。幼児自ら興味や関心をもって遊べるように、教師がねらいや意図をもって環境を整えています。本園でも、幼児の主体性を育むことを大切に保育をしています。今回は3歳児がしたい遊びを見つけて遊んでいる時に起こったブランコの交替をめぐる事例から非認知能力について考えます。具体的な幼児の姿からの非認知能力の見取り、教師の援助や環境構成についてもお話したいと思います。

**西田 鉄平 (NISHIDA Teppei)** / 京都市立下京雅小学校 教頭

下京雅小学校は、同じ敷地内に京都市立幼稚園が設置されているという大きな特徴があります。そこで、遊びを通して学んでいる幼稚園教育の特色から小学校教育をとらえなおし、昨年度より、「心が動く教育の創造」ということをテーマに授業改善に努めています。また、両校園で育てたい非認知能力として、【探究】【ふれあい】【誇り】を掲げ、幼小9年間を見通した教育実践を推進しています。子どもたちが、課題意識をもって、夢中になり熱中しながら学び続けることができれば、自らの力で未来を切り開く人材となるのではないかと考えております。

**西山 由美 (NISHIYAMA Yumi)** / 京都府綾部市立何北中学校 校長

綾部市は小中一貫教育基本構想として「あい紡ぎプラン」を策定し、中学校区ごとに取組を進めています。何北中学校区は、「何北ドリカムDAY」という小中合同授業を柱として、児童生徒の学び合い、教職員の同僚性・専門性の向上を目指しています。その授業は、保護者・地域へ公開し、アンケート形式で評価をしていただき、改善へとつなげています。また、「友だちと協働してよりよいものを創り上げようとする力」「困難があっても物事をやり抜こうとする力」「ゴールを見据えて計画的に進める力」「身体を使って表現する力」を伸ばすため、文化祭では演劇を行っています。

お問い合わせ先:

京都教育大学 研究協力・附属学校支援課 研究協力・センター機構支援グループ  
 電話 075-644-8117 メール kenshien@kyokyo-u.ac.jp

学習  
意欲

協調性

粘り強さ

自己  
効力感

自己  
肯定感

自己  
調整力

京都教育大学フォーラム2022

# 非認知能力を考える

## 一定義・見取り・評価

日時

2022.12.17 [土] 14:00-16:00 (開場13:30)

会場

京都教育大学藤森キャンパス・共通講義棟 大講義室2

### プログラム

14:00 開会あいさつ

太田 耕人 (京都教育大学長)

14:10 趣旨説明

平井 恭子 (京都教育大学 教授・研究推進室員)

14:20 対談「非認知能力の論点をさぐる: 心理学の視点から」

中西 良文 (三重大学教職大学院・教育学部 教授)

田爪 宏二 (京都教育大学教育学部 教授)

14:50 取組報告

濱田 理恵 (京都教育大学附属幼稚園 教諭)

西田 鉄平 (京都市立下京雅小学校 教頭)

西山 由美 (京都府綾部市立何北中学校 校長)

15:50 閉会あいさつ

植山 俊宏 (京都教育大学 教授・研究推進室長)

16:00 閉会

司会進行 神代 健彦 (京都教育大学 教授・研究推進室員)

主催 京都教育大学

後援 京都府教育委員会・京都市教育委員会



## ごあいさつ

太田 耕人 (OTA Kojin) / 京都教育大学長



このフォーラムにおいて下さった方々の間には、「非認知能力」について、おそらく共通の理解があるのではないのでしょうか。しかし、厳密に理解するとなるとなかなか難しいと気づかれるはずです。本日の副題に「定義・見取り・評価」とある所以です。

ノーベル経済学賞受賞のジェイムズ・J・ヘックマンが、2013年刊行の「チビッコたちに公平なチャンス」(Giving Kids a Fair Chance, 邦題「幼児教育の経済学」)のなかで、「非認知能力」(noncognitive skills)の重要性を提唱したことが、この概念を世に知らしめました(「非認知能力」という語の使用自体はもっと早く、すでに2001年に経済学の学術誌で、ヘックマンがルービンスタインと共著で、GED(後期中等教育修了学力検定試験)と「非認知能力」についての分析結果を発表しています)。

IQテスト、学力試験(定期試験、入学試験等)、PISAなどは認知力テストだ、というのがヘックマンの見方です。そうした学力＝認知能力(情報処理能力と言い換えられるかもしれませんが)以外に、大切な「非」認知能力があるというわけです。その言説は私にはしごく当然に響きました。「知徳体」と昔から言うではないか、と。

経済学の目的は「すべての国民の幸せを最大にすること」と言われますから、ヘックマンのアプローチは経済学者としてじつにまともで誠実です。しかし、「認知」や「教育」については、心理学や教育学の観点から改めて捉え直す必要があります。

この十年ほど、心理学のビッグファイブ(5因子モデル)を利用した研究や、従来の社会的スキルと情動的スキルを融合させた「社会情動的スキル」として「非認知能力」を読みかえる試みが進められてきました。「非認知能力」が養われるのは幼児期と考えられており、幼児教育の分野において非認知能力の養成が大きな関心事となってきました。

文科省は2011年に「学力の三要素」の一つとして、「主体的に学習に取り組む態度」を掲げました。これを心理学でいう「自己調整能力」と関連づけるなら、これもやはり非認知能力と深い関わりがあると考えべきでしょう。「非認知能力」は幼児教育の問題だ、とはもはや言っていられなくなりました。

「非認知能力」をどう定義すればよいのか？それはどのように測定・評価しうのか？それを教育で伸ばすことは可能なのか？可能だとすれば、どうすればよいのか？

疑問があふれてきます。おそらく、回答はまだ仮説に留まることでしょう。それでも、これは問う価値のある問いであり、いま私たちが問うべき問いである。私はそう考えています。

## 開催趣旨

平井 恭子 (HIRAI Kyoko) / 京都教育大学 教授・研究推進室員



プロフィール: 専門は、幼児の音楽教育。大学院修了後に公立幼稚園、国立大学附属幼稚園にて保育者として勤務。研究テーマは、うたや身体の動きを使った音楽教育方法や乳幼児の音楽行動にみられるリズム感の獲得過程。2018年4月から2022年3月まで4年間、京都教育大学附属幼稚園長を兼務。監修した視聴覚教材: DVD「音楽的な遊びにみる乳幼児の発達」第一巻～第四巻(新宿スタジオ)。

Society5.0に象徴されるように、社会情勢が目まぐるしく変化する昨今、私たちの生活がどのように変化していくか予測がいつそう困難な時代になっています。そのような中、世界的な関心を集めているのが非認知能力です。非認知能力は、OECDでは社会情動的スキルと言われられており、新しい幼稚園教育要領や学習指導要領の中では「学びに向かう力・人間性等」として、幼稚園から高校まで一貫して育成することが求められています。

いま、教育現場では非認知能力に関わる教育実践に関心が集まっているものの、具体的に子どもたちの姿から何を見取り評価していけばよいのか、認知能力と非認知能力を相互補完的・調和的に育成するにはどうすればよいのか、など、課題は山積しています。そこで、今回の京都教育大学フォーラムでは、心理学的視点から非認知能力を読み解くとともに、幼稚園、小学校、中学校における実践的な取り組みから非認知能力育成につながる指針を得たいと考えています。

## 対談

### 非認知能力の論点をさぐる: 心理学の観点から

中西 良文 (NAKANISHI Yoshifumi) / 三重大学教職大学院・教育学部 教授



プロフィール: 専門は教育心理学。研究テーマは学習動機づけ、自己調整学習、協同学習、社会的スキル教育など。学校場面での学習者の学習改善に興味を持って研究を進めている。著書に「わくわくコミュニケーションプログラム(ナカニシヤ出版。廣岡雅子との共編著)」「多様なPBLの実践事例と7-Stepからの学習過程の検討(三恵社。下村智子との共編著)」

田爪 宏二 (TAZUME Hirotsugu) / 京都教育大学教育学部 教授



プロフィール: 博士(心理学)。専門は発達心理学、認知心理学。研究領域は概念や言語と関わった認知的情報処理のメカニズムとその発達に関する実験的研究、認知的個性を生かした教員養成教育、フィールドに根ざした発達の理解と支援に関する研究など。主な著書「認知発達とその支援」(共編者)、「教職エクササイズ 教育心理学」(編者)など。

非認知能力は、心理学の観点からどのように捉えられるのであろうか。

非認知能力とは、知能やいわゆる学力といった認知能力では「非」ざる能力ということである。心理学では、社会情動的スキルなどの概念がこれに当たるものとして研究が進められている。これらは主に、他者に関わる力と自己に関わる力とに分別することができる。

本対談では、これらに関する心理学的研究からの示唆を共有したい。

そのひとつは、能力をどのように捉えるかに関する示唆である。心理学の測定論では、能力を量的だけでなく、質的にも捉えることを行ってきており、これは非認知能力の見取り・評価にも生きる視点である。また、過去から現在、そして将来の発達を見据えて能力を捉えることの重要性についても示唆を得ることができる。これらに加え、個人の能力を取り巻く環境の影響、すなわち個人の能力が発揮できるような環境であるかも加味して評価することの重要性についても理解することができるだろう。

もうひとつは、非認知能力の育成に関する示唆である。心理学の研究の中では、非認知能力の成長に影響を及ぼすいくつかの要因が見出されており、これらは非認知能力を育む教育的支援について大いに参考になるものであろう。また、非認知能力の育ちには自分の能力に気づき、その能力を発揮する経験が重要であり、上述の通り個人を取り巻く環境の重要性を踏まえるならば、それらの経験を保証するために必要な環境の整備のあり方についての知見が得られるであろう。例えば、非認知能力は、個人にある程度の自由度が与えられた環境の中で発揮できると考えられるため、そのような自由度を確保する環境も重要であろう。さらに、非認知能力は認知能力も含めた様々な能力が影響し合いながら育っていくという視点も重要であると考えられる。

以上の視点を中心に、教育心理学(中西)と発達心理学(田爪)の立場から、教育の中で非認知能力をどう捉え、支援していくかについて議論を深めたい。